

[書評]

# 開かれた書物に、生の態勢を学ぶ

前田英樹『ベルクソン哲学の遺言』(岩波書店、2013年)

日高優

## 読むことと書くこと——ベルクソンの哲学を開く

ベルクソンの哲学は、前田英樹氏という書き手に、抜きがたく浸透している。「私は二十冊ほどの本を書いたが、ベルクソンの影響を免れて書き得たものは一冊もない」。本書『ベルクソン哲学の遺言』は、その前田氏が丸ごと一冊を捧げて、初めてベルクソン哲学を扱った、待望の書である。前田氏は、解釈でも解説でもなく、ベルクソン哲学の意味をはっきりと書いた。読者は間違えても、ベルクソンの哲学と他の哲学者の哲学体系との影響関係を探るだの、ベルクソンの言葉を哲学史に配置される諸概念と並べてみるだのといった類の、巻の本を思い浮かべてはならない。ひとたび本書を紐解けば、そのようにしてはベルクソン哲学に辿り着けないことがすぐに了解されるだろう。いわゆる専門、学術ジャンルとしての哲学ということは、ベルクソン哲学にとっても本書にとっても、本質的なことではない。ベルクソンが解明しようとしたのは世界の、宇宙のありようであり、そこには専門という境界もなければ、何の分割線もない。専門用語や概念の防御で読者を阻んだり閉域を作り出したりすることは、むしろベルクソンのモチーフをみえにくくするだけだ。ベルクソンの哲学とは、観念によって世界の成り立ちを余すところなく体系的に説明可能とする空疎な「大哲学」ではなく、生活に根差しつつ、蓋然性を高める努力によって遂行されていく「実証的形而上学」——「科学と同じだけ正確な方法で、生命的傾向を扱う」哲学、近代科学の支配的趨勢の裏で抑圧されてきた、科学自体の慕わしい半身——たることを企図するものなのだ。前田氏は、この本を、「哲学などにはさして関心はないけれど、物事を〈拡がり〉ではなく、その〈深さ〉で考えたい人のために」書いた。「それが、ベルクソンの願いだったからである」。宇宙の生命的傾向のみがもたらす〈深さ〉を、潜在性の諸水準を、哲学によって回復すること

— 前田氏は、この目的を分け持って、ベルクソンをただひたすらに追想／追走し、一冊の書物を書いた。筆者のこの態勢によって、比類なき本書は生まれ落ちた。

アンリ・ベルクソン（1859-1941年）は、「私は、公衆に読んでもらいたいものすべてを刊行したと宣言」し、自らの死後、生前に刊行した七冊の著書以外の出版を厳に禁じる「遺言状」を残した。前田英樹氏が本書を編む導きの糸としたのが、この「遺言状」だ。なぜ、「遺言状」だったのか。それは、氏がベルクソンの著書を長年愛読することを通じて、この哲学者の他の著述にはみられない、「遺言状」の奇妙にも激しいトーンを聴きとってしまったからだ。「遺言状」はよく知られたものとなっているが、人はその〈在るもの〉をよくみることも、その声に十分に耳を傾けることもなく、いとまたやすく行き過ぎる。だが、ベルクソンの哲学を身に入れるように読み、愛読してきたこのひとりの書き手が、遺言状の「生きて働く」〈呼びかけ〉を聴きとったのだとしたら、それは読むごとにますます大きく鳴り響いてきたのだろう。本書において、遺言状は、もうひとつの遺言として氏が見出す『思想と動くもの』の「序論」とともにそれ自体、ベルクソンの思想的テキストとして読まれる。ベルクソンが何と闘い、どこへ向かったのか。ベルクソンの哲学は、私たちに何を明らかにし、何を託したのか。遺言状の〈呼びかけ〉に応えるように、前田氏がベルクソン哲学の秘密に接近していくその行程のただなかで、つまりはこの著者が書き進む筆の動きのただなかで、処女作『意識の直接与件に関する試論』（1889年）から『道徳と宗教の二源泉』（1932年）に至るまで、ベルクソンが生涯をかけて為した仕事が、「音楽的円環」のように生き生きと浮かび上がってくる。

「彼（＝ベルクソン）ほど、その思索の曲折と書かれたものの展開とを見事に一致させて生き抜いた人はいない。それは、思索することへの彼自身の激しく強固な意志、たゆむことのない努力がはっきりとそうさせた」のである、と、この本の著者は記す。そのベルクソンの努力と遺書の〈呼びかけ〉に応答する、四十余年にも及ぶ、ベルクソンの著作の〈愛読〉— 前田氏は、その自らの愛読だけをよりどころとして、本書『ベルクソン哲学の遺言』を書いた。歳月を重ねて前田氏が徹底してベルクソンの著作に入り込み、そのモチーフを掴まえて書いた本書は、氏のものでありながら、氏とベルクソンの共作ともいうべき、唯一無二の書物となった。私は、書物を読むということ、そして書くということのなんたるかを改めて自らに問い直すことなしに、本書を読み進めることはできなかった。前田氏の著作はどれも、これまでもそのような問いを私に突き付けてきたけれど、本書は文字通り、そうだったのだ。氏が礎とする〈愛読〉とは、自らの経験に照らしつつ、身に入れて読む、わ

がこととして読むということだろう。実際、本書を読めば明らかだが、この書き手はベルクソンの書いた言葉を満身に招き入れつつ虚心坦懐に読み、自身が生きる経験を携えて自らの言葉で本書を紡いだのだ。隅々までそのように書かれているということが身に沁みわたり、読者は本書に静かに深く圧倒されていくだろう。氏がベルクソンに倣い随所で挙げる事例が、ベルクソンの哲学を生き活きと到来させ、確かにそれに触れた手ごたえを読者に与える。日常のありふれた例が、ベルクソンの哲学のもとに招喚され、輝きをさえ纏う。例えば、犬の知覚の例——〈よく視る私の単純な行為〉と、〈視られる運動の単純さ〉は一致して働くほかない。犬が走る努力と、それを視る私の努力は、溶け合ってしまうようであり、「同じ時間を生き、単純な持続のなかで疲労し、やがては別の運動へ」と移行していく……。書きつけられた「努力」という語の響きは、その凡庸さを脱ぎ捨て、まるで初めて読者を包むかのように広がる。

借り物の言葉も概念もなく、徹頭徹尾このようにして一冊の書物が書かれうることを、読者は何度でも確かめるだろう。私たち読者は、本書を通して、ベルクソンの哲学の内側に入るようにして、それに触れることができる。これほどまでに対象に深く読者を導いてくれる書き手を、私は浅学にして、前田氏を措いて他にあまりよく知らない。

そもそもベルクソンの著作には、ある種の難しさが付き纏う。ベルクソンの本を難解にも複雑にもしているものの多くは、在るものをみることなき支配的趨勢——跋扈する科学主義や観念で体系化される認識哲学など——に抗するために要さざるを得なかった論述の構えや言葉の数々に由来しているようだ。私はかつて前田氏の講義を通して知った。だが、本書のもとで、ベルクソンの著作は己が纏っていた困難さを解き、自らを読者に開いていくのだ。「彼（＝ベルクソン）の著作を読むことは、この困難に就き従い、これをわがこととして追想し、ついに読者自身の困難として乗り切ることにはほかならない」——このように読み、そして自らの内から生まれる言葉で書ききる前田氏の態勢こそ、ベルクソンが自らに厳しく課した学ぶことの態勢に真っ直ぐに通じている。志操堅固の、屹立した書物のみが放つ孤高、そして、読者を柔らかく歓待する開かれ。本書は、ベルクソンの著作とともに、その両者をひとつに切れ目なく湛えて在る。

## 轍としての書物

本書を要約することは出来ない。私の能力の問題もあるが、ベルクソンの哲学が



そうであるように、本書は「どんな切れ目も部分もなく一挙に成り立つひとつの行為」として成り立っているから。私は学生に戻るようにノートをとり、いろいろと書きつけつつ本書を読んだから、本稿で、私に特に食い込んできた

箇所を記したり、それに対する私なりの所感や見

解を述べたりすればいいのかもしれないが、部分だけを取り出すことで失われるものはあまりに多い。そのうえ、一挙にな

されつつ花開いていく、そのようなこの書物を語るためには、私自身がこの書物を

追想／追走し、書物の運動を運動としてとらえるだけの愛読と言葉の鍛練とを積んでいかねばならないと思うばかりだ。このような次第を述べたうえで、本書の章立てを示しておこう——第I章「遺言状」、第II章「ほんとうの障害物に出会う」、第III章「砂糖が溶ける時間」、第IV章「直観が〈正確〉であること」、第V章「〈記憶〉についての考え方」、第VI章「〈器官〉についての考え方」、第VII章「持続が目指すところ」、第VIII章「哲学の目的」。そして、要約は出来ないが、章立てに沿って、本書のひとつの道筋を素描しておこう。

ベルクソンの出発点となったのは、ハーバート・スペンサーの『総合哲学体系』だったが、その進化の哲学には、「実在の時間」がごっそりと抜け落ちていた。ベルクソンは、この実在する時間という問いに、ほんとうの障害物として衝突した（「砂糖水が飲みたければ、砂糖が水に溶けるのを待たねばならない」、そのじれて待つ、「実在の時間」に）。やがて彼は、科学の知性や日常の功利性への志向が取り零す「持続」という時間が、物質ではなく生命、心、精神のほうにだけ開かれていくことを見出し、

持続をとらえることなき心理学や、在るものを在るものとして捉え損ねる認識哲学の「カント主義」と対決しつつ、「内的生命の領域」の探究へと赴いていった。そして、持続たる宇宙のありようを、宇宙の物質的傾向と生命的傾向とを、一步一步正確に掘り進めて明らかにし、長年の懐胎期間を耐えて一冊、一冊と書物を生み落していったのである。生命と物質は二項対立としてあるのではなく、潜在的なものと現働化したものであって、在るものを在るものとしてみるには、そのような宇宙のありようをこそ、正確にみなくてはならないのだ。ベルクソンの哲学のもとで、〈直観〉とは、時間を排斥する知性の働きとは逆向きに「実在の直接のヴィジョンを得る」ことであり、「持続のなかに身を置き直し、<sup>リアリテ</sup>実在をその本質である運動性<sup>モビリティ</sup>のな

らぬものとして捉え損ねる認識哲学の「カント主義」と対決しつつ、「内的生命の領域」の探究へと赴いていった。そして、持続たる宇宙のありようを、宇宙の物質的傾向と生命的傾向とを、一步一步正確に掘り進めて明らかにし、長年の懐胎期間を耐えて一冊、一冊と書物を生み落していったのである。生命と物質は二項対立としてあるのではなく、潜在的なものと現働化したものであって、在るものを在るものとしてみるには、そのような宇宙のありようをこそ、正確にみなくてはならないのだ。ベルクソンの哲学のもとで、〈直観〉とは、時間を排斥する知性の働きとは逆向きに「実在の直接のヴィジョンを得る」ことであり、「持続のなかに身を置き直し、<sup>リアリテ</sup>実在をその本質である運動性<sup>モビリティ</sup>のな

らぬものとして捉え損ねる認識哲学の「カント主義」と対決しつつ、「内的生命の領域」の探究へと赴いていった。そして、持続たる宇宙のありようを、宇宙の物質的傾向と生命的傾向とを、一步一步正確に掘り進めて明らかにし、長年の懐胎期間を耐えて一冊、一冊と書物を生み落していったのである。生命と物質は二項対立としてあるのではなく、潜在的なものと現働化したものであって、在るものを在るものとしてみるには、そのような宇宙のありようをこそ、正確にみなくてはならないのだ。ベルクソンの哲学のもとで、〈直観〉とは、時間を排斥する知性の働きとは逆向きに「実在の直接のヴィジョンを得る」ことであり、「持続のなかに身を置き直し、<sup>リアリテ</sup>実在をその本質である運動性<sup>モビリティ</sup>のな

らぬものとして捉え損ねる認識哲学の「カント主義」と対決しつつ、「内的生命の領域」の探究へと赴いていった。そして、持続たる宇宙のありようを、宇宙の物質的傾向と生命的傾向とを、一步一步正確に掘り進めて明らかにし、長年の懐胎期間を耐えて一冊、一冊と書物を生み落していったのである。生命と物質は二項対立としてあるのではなく、潜在的なものと現働化したものであって、在るものを在るものとしてみるには、そのような宇宙のありようをこそ、正確にみなくてはならないのだ。ベルクソンの哲学のもとで、〈直観〉とは、時間を排斥する知性の働きとは逆向きに「実在の直接のヴィジョンを得る」ことであり、「持続のなかに身を置き直し、<sup>リアリテ</sup>実在をその本質である運動性<sup>モビリティ</sup>のな

らぬものとして捉え損ねる認識哲学の「カント主義」と対決しつつ、「内的生命の領域」の探究へと赴いていった。そして、持続たる宇宙のありようを、宇宙の物質的傾向と生命的傾向とを、一步一步正確に掘り進めて明らかにし、長年の懐胎期間を耐えて一冊、一冊と書物を生み落していったのである。生命と物質は二項対立としてあるのではなく、潜在的なものと現働化したものであって、在るものを在るものとしてみるには、そのような宇宙のありようをこそ、正確にみなくてはならないのだ。ベルクソンの哲学のもとで、〈直観〉とは、時間を排斥する知性の働きとは逆向きに「実在の直接のヴィジョンを得る」ことであり、「持続のなかに身を置き直し、<sup>リアリテ</sup>実在をその本質である運動性<sup>モビリティ</sup>のな

らぬものとして捉え損ねる認識哲学の「カント主義」と対決しつつ、「内的生命の領域」の探究へと赴いていった。そして、持続たる宇宙のありようを、宇宙の物質的傾向と生命的傾向とを、一步一步正確に掘り進めて明らかにし、長年の懐胎期間を耐えて一冊、一冊と書物を生み落していったのである。生命と物質は二項対立としてあるのではなく、潜在的なものと現働化したものであって、在るものを在るものとしてみるには、そのような宇宙のありようをこそ、正確にみなくてはならないのだ。ベルクソンの哲学のもとで、〈直観〉とは、時間を排斥する知性の働きとは逆向きに「実在の直接のヴィジョンを得る」ことであり、「持続のなかに身を置き直し、<sup>リアリテ</sup>実在をその本質である運動性<sup>モビリティ</sup>のな

らぬものとして捉え損ねる認識哲学の「カント主義」と対決しつつ、「内的生命の領域」の探究へと赴いていった。そして、持続たる宇宙のありようを、宇宙の物質的傾向と生命的傾向とを、一步一步正確に掘り進めて明らかにし、長年の懐胎期間を耐えて一冊、一冊と書物を生み落していったのである。生命と物質は二項対立としてあるのではなく、潜在的なものと現働化したものであって、在るものを在るものとしてみるには、そのような宇宙のありようをこそ、正確にみなくてはならないのだ。ベルクソンの哲学のもとで、〈直観〉とは、時間を排斥する知性の働きとは逆向きに「実在の直接のヴィジョンを得る」ことであり、「持続のなかに身を置き直し、<sup>リアリテ</sup>実在をその本質である運動性<sup>モビリティ</sup>のな

らぬものとして捉え損ねる認識哲学の「カント主義」と対決しつつ、「内的生命の領域」の探究へと赴いていった。そして、持続たる宇宙のありようを、宇宙の物質的傾向と生命的傾向とを、一步一步正確に掘り進めて明らかにし、長年の懐胎期間を耐えて一冊、一冊と書物を生み落していったのである。生命と物質は二項対立としてあるのではなく、潜在的なものと現働化したものであって、在るものを在るものとしてみるには、そのような宇宙のありようをこそ、正確にみなくてはならないのだ。ベルクソンの哲学のもとで、〈直観〉とは、時間を排斥する知性の働きとは逆向きに「実在の直接のヴィジョンを得る」ことであり、「持続のなかに身を置き直し、<sup>リアリテ</sup>実在をその本質である運動性<sup>モビリティ</sup>のな

らぬものとして捉え損ねる認識哲学の「カント主義」と対決しつつ、「内的生命の領域」の探究へと赴いていった。そして、持続たる宇宙のありようを、宇宙の物質的傾向と生命的傾向とを、一步一步正確に掘り進めて明らかにし、長年の懐胎期間を耐えて一冊、一冊と書物を生み落していったのである。生命と物質は二項対立としてあるのではなく、潜在的なものと現働化したものであって、在るものを在るものとしてみるには、そのような宇宙のありようをこそ、正確にみなくてはならないのだ。ベルクソンの哲学のもとで、〈直観〉とは、時間を排斥する知性の働きとは逆向きに「実在の直接のヴィジョンを得る」ことであり、「持続のなかに身を置き直し、<sup>リアリテ</sup>実在をその本質である運動性<sup>モビリティ</sup>のな

らぬものとして捉え損ねる認識哲学の「カント主義」と対決しつつ、「内的生命の領域」の探究へと赴いていった。そして、持続たる宇宙のありようを、宇宙の物質的傾向と生命的傾向とを、一步一步正確に掘り進めて明らかにし、長年の懐胎期間を耐えて一冊、一冊と書物を生み落していったのである。生命と物質は二項対立としてあるのではなく、潜在的なものと現働化したものであって、在るものを在るものとしてみるには、そのような宇宙のありようをこそ、正確にみなくてはならないのだ。ベルクソンの哲学のもとで、〈直観〉とは、時間を排斥する知性の働きとは逆向きに「実在の直接のヴィジョンを得る」ことであり、「持続のなかに身を置き直し、<sup>リアリテ</sup>実在をその本質である運動性<sup>モビリティ</sup>のな

かで捉え直」す努力、「時間の内に復帰」する方法として取り出されてくる。直観によって、私たちは内的持続を、宇宙の持続をとらえることができるのだ。前田氏の筆致にのって、持続という過去が生き物の行動に応じた諸水準をもつ記憶となることが辿られ、遂には、私たちは自身の持続の最も弛緩した水準において、宇宙の持続全体とつながる、権利上の「純粹記憶」の領域にまで運ばれる。持続とは在るものの一切の在り方であり、私たちの生と宇宙とが直接に繋がっているということ。ひとつの持続であるということ。私たちがそのように在るということ。物質の運動と、生の持続を架橋し相互浸透させるのは、イマージュの縮減というメカニズムをとる知覚の、とりわけ直観の——直観は知覚の能力で、〈精神による精神の知覚〉を与える——努力であるということ。これらのことを知ることは、生命的傾向を置き去りにして物質的傾向の方を伸長させて立ち至った現代社会の生にとって、どれほど深い根底からの支えとなることだろう。進化の諸線を生むのは生の持続それ自体の力ゆえであり、科学が主張する「環境」や「適応」の観念が根底から問い直され、生き物の「器官」は持続の力が通過した物理的抵抗の跡であると、明らかにされる。ベルクソン哲学は、一貫して、実在する時間＝持続を排除してきた科学という知性の働きが生＝持続に加える攻撃、観念がおこなう生＝持続に対する攻撃に抗しつつ、直観を用いる哲学により、在るものを在るものとしてとらえる道を進む。そして辿り着いた『道徳と宗教の二源泉』のもとで、「潜在的本能」による「仮構機能」としての「宗教」の問題へと至る。最終的には、人類という創造のひとつの停止、停滞をさらに押し進め、実在としての運動それ自体に送り返す神秘主義の動的営みをみることへと至るのである（因みに、本書にも記されているように、「神秘主義」の語はあやしげなものとして誤解を受けやすいが、この語を用いてベルクソンは、聖パウロといった神秘家たちの行動する人間の価値を、動的な価値として新たに取り出したまでだ。彼らの見神や恍惚といった偶発的経験は重要ではなく、ベルクソン自身も神秘主義者ではない。「静止させられたものを運動に送り返す」ベルクソンの哲学とは、持続して在るものを在るものとしてみることであり、「在るものに触れる喜びを、いつもはっきりとわがものにする努力」である、と、筆者は記す。この努力とは殆ど、在るものを愛するというを取り戻すための、静謐な祈りのようなものであることだろう。

声高に何とかかを訴えることも主張することも一切ないが、ベルクソンの哲学を通じて本書が向かう先は、読者の内側から湧き上がるように感得されるだろう。本書は、ベルクソンの哲学がひたすら真っ直ぐに突き進んだ「単純なひとつの行為」たるその努力の轍を、前田氏自身が身に入れるように追想／追走して読み、書くこ

とによって押し進めた努力の轍、同じく単純なひとつの行為の轍である。

## 本書と映像身体学

ところで、専門も非専門もなく、広く一般の人々に向けられているからと言って、本書が大学での学びや学問に対する多くの本質的な貢献を為すことを妨げるものは、ない。本書に直接関係する心理学や生物学、物理学や映像学といった学問に対しての貢献ばかりではない。本書の轍には、身体から教育、言語の思考にまで及ぶ、ベルクソン哲学の裾野がみえる。ただひとつのものとして在る宇宙で為された、ただひとつの優れた行為には、どのような物事を巡る思考が潜在していたとしても、不思議はなからう。だから、めいめいの読者が、自身の問いをもって本書を読み、潜在するものから回答の手掛りを引き出せばよい。専門やジャンルに囚われることなく、自らを開き読めば、本書の内容ばかりでなく、本書が採る学びの態勢からも、学問の徒は誰でも、自らの仕事に多くを持ち帰り育てることができよう。学術も大学も、生命の傾向の側が後景化し、「科学的知」に席卷される社会に根差している以上、そうなる。だが、本書はやはり直接的に、「映像身体学」の思考と同心円を描く。ベルクソン哲学の支え、そしてベルクソンの『物質と記憶』を基礎として『シネマ』という新しい思考の領域を拓いたドゥルーズ哲学の支えなしに、映像身体学の内容と意義とを明確かつ先鋭化するの難しいから、ベルクソン哲学をつかみとった本書は、映像身体学の必読書というべきものだ。ところで、映像身体学とは何か。それを知るには、映像身体学という思考の場の創設を記念した書物、立教大学映像身体学科編『映像と身体——新しいアレンジメントに向けて』（せりか書房、2008年）で、二人の創設の立役者、前田英樹氏と宇野邦一氏のテキストに当たることが最善だが、本稿ではあくまで本書の意義を明らかにする意味で、紙幅を割いておきたい。

映像身体学とは、ひとつの〈思考の領域〉である。だから、それは、ひとつのディシプリンを精緻化し構築していくような、専門化を志向する既存の学問とは異なるし、また、そのようなディシプリンを寄せ集める総合とも異なる。映像身体学とは何かを一言で言うとするれば、ひとまずそれは、機械映像の時代に在るものをみるということ、知覚することを思考する営みであり、実践であると言えよう。映像身体学という思考の領域が成り立つとするれば、まず何よりも〈知覚〉の問題を中心として、なのである。

映像身体学は、19世紀における機械の知覚による映像の誕生という、人間にとって全き新しい事態の出来を受けて、発動する。身体を持った人間は、自分の外に在

るものを知覚することができるが、人間ならざる機械たるカメラが世界を知覚し映像を生むという新たな事態を、人間は引き受けることになった。そして機械映像は、人間の知覚を突破して身体のかなかに侵入し、知覚を拡張していく。19世紀に機械映像が誕生して以降、さらなる科学技術の進展により次々と新たなメディアが誕生し、この事態はもはや立ち止まって顧みられない、古色蒼然とした過去の経験と見做される向きもあるかもしれない。だが、実はこの知覚経験の意味は、いまなお汲み尽くされておらず、この経験に対していかに人間が有効な問いを立て回答するか、いかに良き生のためにわがものとしてできるかは、いまだ殆ど探究されていない。だから、それらを映像身体学は引き受けたのだろう。そして、現代社会の混迷のただなかで、進んで引き受けるだけの意味は、あり過ぎるほどであると、私には思われる。

映像身体学が拓こうとする思考の核は、ベルクソンの哲学に、さらにはベルクソンの『物質と記憶』を基礎としたドゥルーズの『シネマ』の思考に、ひとすじに辿ることができる。機械映像誕生の衝撃が、ベルクソンの思考にいかにか鋭く食い込み、その基底を成しているかは、本書第III章「砂糖が溶ける時間」が教えてくれる。ベルクソンは、映画という同時代的な新たな知覚経験を自らの哲学に取り込み、映画のメカニズムを用いて人間の知覚のメカニズムを説明するのだ。この知覚のメカニズムこそが、在るものもつ潜在性の諸水準を、さまざまな度合いを、深さの存在を——生命的傾向のみが持ちうる宇宙の深さ、イマージュの総体たる宇宙の深さを——与える。ベルクソンは、イマージュとは物質であり、宇宙はイマージュの総体であるとして、イマージュが単なる脳内映像でも心的映像でもなく、それ自体で自己の外に実在することを明らかにしていった。このマテリアリズムの思考が、在るものが在るということを根底から支え、また、かつて前田氏が宇野邦一氏との対談で述べたように、ベルクソンとドゥルーズの思考を結ぶ通路となっている<sup>[1]</sup>。ドゥルーズは、『シネマ』でベルクソンのマテリアリズムを押し進め、映画のイマージュは即自的に実在し、かつ世界と映画とは位相を異にするが同じ実在するイマージュであるという、全く新たな思考の領域を、映画の存在論を、拓いたのだった。とまれ、人間は、自分の外に在るものを、世界を、知覚することができるし、その外に在るものは、世界は、確かに在る。機械映像の経験は、ベルクソンとドゥルーズの

---

[1] 宇野邦一・前田英樹「(対談) ドゥルーズのマテリアリズムとは何か——死活を問う哲学」、『ドゥルーズ——没後10年、入門のために』河出書房新社、2005年。マテリアリズムとプラグマティズムとは、映像身体学の思考を支えるものでもあるだろう。

思考に招喚されて、それを私たちに教えてくれた。

本書第 III 章に記されているのは、イメージの縮減という知覚のメカニズムを巡るベルクソンの思考であり、またそれは同時に、映像身体学のエッセンスである。人間の身体の外部に在るものが在ることを出発点として、それでは「人間の知覚や意識が、その生命的持続のなかに外界の物を取り込むのはどのようにしてか」という、次なる問いに、ベルクソンは赴く。ベルクソンは、自らの創造したこの問いに、映画の知覚原理を引き合いに出して、次のように回答する——「〈生命的傾向〉と〈物質的傾向〉の間の膨大な「調整」を行なうことで、取り込むのだ、と。知覚や意識による「調整」を通じて、人間は自分の外に在るものに触れることができる、そう、ベルクソンは明らかにしたのだ。「調整」について、前田氏は記す。「私たちひとりひとは、言わば身体の中に、カメラと映写機とを同時に埋め込み、働かせている。人間の知覚は、二つのことを同時に行なう」。映画を知覚することと、世界を知覚することが一直線に結ばれ、字義通りに映画を通して世界を思考するという映像身体学の態勢が整うのに、本書で私たちは立ち会う。

このように、ベルクソンやドゥルーズは、映像身体学のエッセンスや態勢となるものを切り拓いたが、無論、そのことを本書がはっきりと書くことができたのは、ベルクソンを読み抜いてきた前田氏によるからに他ならず、氏がベルクソンのモチーフをはっきりと掴み、それをベルクソン自身の著述以上に浮き彫りにしているからだ。だから例えば、氏は、ドゥルーズが『シネマ』で、ベルクソンの砂糖水の例を引き合いに出す箇所につづかった、いや、ぶつかることができた。どういうことか。

本書第 III 章で、前田氏は、ベルクソンの『創造的進化』第四章「思考の映画的メカニズムと機械論的錯覚」、及び『思想と動くもの』「序論」が扱う、映写機の機械的運動と映像そのものの運動、私たちによる映像の知覚との関係を辿っている。ベルクソンを愛読し続けると同時に、〈知覚〉の問題を核とする映像身体学を志向＝思考し続ける著者が、そこで書き記すのが、ドゥルーズの砂糖水の説明には抜け落ちた、〈知覚〉の問題だ。砂糖が水に溶けるのを待つとは、ベルクソンにおいて、溶けるのを〈視る〉という知覚の問題をもつことなしに考えることができない、と、前田氏は記す。「(砂糖の溶解という)物の変化は、知覚されることで、待たれる時間になる。持続になる。知覚されることは、すでに物が生命に入り込まれることである」——ベルクソンが砂糖水の例で最も言いたかったことを、氏はこのように正確かつ鮮やかに浮き彫りにする。いかに物が生命に入り込むか、生命という持続が物を取り込むかということこそが、ベルクソンの問いだったのだから、それを見失うこと

なしに、読み抜かねばならない、前田氏はそう言うかのようだ。そして氏は、ベルクソンとドゥルーズを引き継ぎ続ける——物質と生命は、持続たる宇宙の二つの傾向であり、たえず相互浸透している。物質であれ、身体であれ、心であれ、貫いて流れるのでなければ、時間は時間とは言えない。運動は運動とならない。機械の知覚たる映画の運動は、「非人称的で抽象的で単一」な「運動一般」とでも呼ぶべきものだが、それを視る私の〈知覚〉によって、私は映画の運動を自己の持続に結びつけ、次いでその持続を画面のさまざまなものに配分することで、私の身体を映画のなかに入り込ませることができる、と。私の身体の外に在る映画というイマージュに、宇宙というイマージュに、私たちは知覚を通じて入ることができる。本書の著者は、自らがぶつかった問いと、それへの回答を、このように書き進めていった。

だが、なぜ、本書も映像身体学もいま、それほどまでに、在るものが在ると言われねばならないのか。人間は身体を持ち、自分の外部に在るものを知覚すると言われねばならないのか。本書は、ベルクソンの哲学をはっきりと書くことに徹頭徹尾捧げられていて、なぜ、私たちの生きる時代に、この本が書かれたかについては、直接には殆ど何も語りはしない。声高に己の意義を言い募る書物が溢れかえる喧騒のなかで、本書は静かにひとり立つ。だが、本書を追想／追走しようとする読者には、そのことは実ははっきりと浮かび上がってくるはずだ。少なくとも、私たちは、何度でも、次のことを思い起こしておこう。人はいともたやすく在るものをみることなく、在るものの声を聴くことなく、行き過ぎる、ということ。だから、在るものは在り、人間はそれを知覚できると、知覚を通じて在るものに触れ、世界に触れることができると、そこには喜びが在ると、言うのだ、と。この事情は、ベルクソンが実在する時間を実在するものとして明らかにし、置き去りにされた生命的傾向の探究へ赴かざるを得なかった頃と、いまなお殆ど変らぬようだ。むしろ、在るものは在ると喜びの側から言う必要は、世界への信頼を欠き混迷を深める現代において、さらに高まっていると言える。ここに、本書と映像身体学とがともに切実に求められる、もっとも単純な理由があるのではないか。科学は、世界を計量化し予測可能な拡がりで見做すことで、つまりは、知性で宇宙の物理的傾向を全面化して宇宙に働きかけることで、人間社会を飛躍的に発展させてきた。その科学的知性に依拠する私たちの社会は、物事を拡がりで考える思考を肥大化させ、在るものを無きものと等しく抑圧し、袋小路に陥っている。メディアによる媒介に次ぐ媒介などと言われて既に久しく、人間の変容やポスト・ヒューマンが論点を成し、精神疾患が日常の話題にのぼり、人と人という在るものを巡る関係を「社会関係資本」

と名づけて擁護しなくてはならないほどに、在るものの手触りが加速度的に失効していると感受され、議論もされてきた。グローバリズムの進展とメディアのネットワークの拡張とは裏腹に、緊密な紐帯を断ち切られた人間と人間はバラバラに孤立化し、相互接触を欠いて閉じていくとは、多くの書物が述べるところだ。だが、ともあれ、在るものは、在る。そして、人はどのように変容しようとも相も変わらず身体を持ち、〈知覚〉を通して自分の外に在るものに——他者であれ、自然であれ、物であれ——在るものとして知覚を通して触れ、さまざまな深さで交わることができる。この単純なことを手放すことなしに、それを幾たびなりとも明らかにし、その喜びをわがものとする努力を実践し続けること、このように本書がつかまえたベルクソンの哲学の目的を、究極的に、映像身体学は分け持っているのではないか。そして、映像身体学は、本書に何よりも生の態勢をこそ、学ばせよう。

### 「在るものに触れる喜び」に向かう——ベルクソンの哲学、前田氏の哲学

部分をかき摘まんで本書の道筋だけを記しても、映像や身体の知覚についての本書の思考、あるいは映像身体学に対する貢献をどれほど書き記しても、十分ではない。繰り返せば、本書を要約することも、部分を取り出すことも、そもそも出来ない。丸ごと読むのでなければ、意味がないのだ。丸ごと読めば、この開かれた書物に、生の態勢を学ぶことができる。

前田氏は、「哲学の種子」を、「まずなによりも生活し、そして生活するだけでは足りないと感じるあらゆる人々の手の中に、いつもはっきりと委ねられている」と記す。本書は、ベルクソンの願いと共に、そのような人々にこそ、差し向けられている。であるならばなおさら、私たち自身が一行一行をわが身に入れるように本書を読み、本書を通して、ベルクソンが出逢った障壁に〈ベルクソン—前田とともに〉ぶつかり、自らの問いと回答とを創造しつつ、ジグザグに進んでいくことを求めるのでなければなるまい。本書を読み進める道筋のなかに、そして自らの内で、読者は「単純なひとつの行為」であるベルクソンの哲学のありようを確かめ、哲学という「在るものに触れる喜びを、いつもはっきりとわがものにする努力」を確かめるのでなければならぬ。そのように求めて読む者に対してこそ、ベルクソンの哲学が、ベルクソンの哲学を書く前田氏のひたむきな努力と哲学とが、花開く。

本書はベルクソンの哲学をはっきりと書く書物であり、そうすることによって即、前田氏が己の哲学をはっきりと記す書物である。氏はベルクソン以上にベルクソンのモチーフを浮き彫りにし、ベルクソンの哲学を、そしてベルクソン哲学とともに

生きる前田氏の哲学を、私たちに届けてくれた。無論、私が「ベルクソンの哲学」、「前田氏の哲学」と書いたからと言って、固有名を閉じた印とってはならない。ベルクソンは、観念の連鎖によって、任意の世界体系を打ち立ててしまうような「哲学」と闘い、「蓋然性」を高めていく「実証的形而上学」を生涯かけて志向し続けたことに思いを致そう。固有の名に、身ひとつで生きる人間の、圧倒的な開かれをこそ、感受すべき場合もあるのだ。そして、本書もまた、そのような書物としてすがすがしさとひとり立つ厳しさとを湛え、活きた〈呼びかけ〉を行い、読者の愛読を待っている。ベルクソンの哲学を読むとは、ベルクソンの努力を私たち「めいめいの生き方のなかに、採用」しようと努めることだ。そのようにベルクソンの哲学を読もう——本書は、「在るものに触れる喜び」へと向かう努力の実践[2]を呼びかける、〈いざない〉の書である。

日高優 | ひだかゆう

立教大学現代心理学部映像身体学科准教授 | 写真研究・映像身体学・表象文化論

---

[2] ベルクソンの哲学がそうであるように、映像身体学にとっても、思考と実践とは協働するほかない不可分なふたつの核を成す。映像身体学の学びと教育が、直接的な実践の営為として、手仕事、制作を招喚するのには、必然的なそのような理由があるのだ。無論、思考そのものが実践でもあり、制作が思考でもある。本書第 VIII 章「手仕事の効用、感覚の教え」の箇所は、その実践の卓抜な手引きとなる。